

「建築の信頼回復フォーラム」が主催する提案論文で最優秀賞受賞

「信頼できる建築とは何か・安心して暮らせる家づくりとまちづくり」をテーマに、「建築の信頼回復フォーラム」(兵庫県、日本建築家協会、兵庫県建築士会、兵庫県建築設計監理協会、兵庫県建築設計事務所協会主催)が神戸市の兵庫県公会館で3月14日に開かれた。同主催で提案論文の募集があり、JIA会員の連健夫氏が最優秀賞を受賞した。会場には300名を超える一般の人たちの出席があり、フォーラムと併せて投書式が開催された。

基調講演を行った渡辺篤史氏は「建物探訪において建築家はあこがれと信頼の対象であった。姉南事件は青天のへきれき。建築士は神祕から託された資格であり公の意味を考えて欲しい」と建築士に対する強いメッセージを述べた。パネルディスカッションでは、武田明則氏(建築家・いきいき下町推進協議会運営委員)は「建築設計がビルダーの下請けになってはいけない」と職能の姿勢を正した上で、設計料が安いことの問題を指摘した。榎井政子氏(兵庫県消費者団体連絡協議会会長)は建て売りなど建築生産システムの問題を指摘し、「消費者に自己責任、自己防衛の意識がな過ぎる。自分の住環境に興味関心を持つべき」と消費者にアドバイスした。弁護士丸山富夫氏は建築基準法改正について、「規制を強くすれば良いというものではない、過度の規制は技術や社会の発展の阻害要因となる」と批判した。そして「規制と自由競争のバランスが大切」という立場で「配膳の写真を見



せることを義務づける、セカンドオピニオンを聞く、銀行は完了検査済証においてお金を貸す」など、具体的提案を示した。ディスカッションの中で、「住居」の必要性が指摘され、それによって一般の人は自分の家や環境に対して興味を持ち、建築家を選ぶことの大切さやまちづくりに参加する大切さを理解することができるのでは、という意見が述べられた。連氏は論文の中で、「信頼できる建築を目指して」1.匿名性を廃止し、顔が見える設計にいく 2.同じ目線に立った施主への情報公開と「参加する設計プロセスの共有」 3.文化としての建築づくりの3つのステップの必要を説いている。以下、受賞論文を3分の2に圧縮して掲載する。

「信頼できる建築を目指して」の3つのステップ

【最優秀賞受賞論文】

「信頼できる建築を目指して」3つのステップが必要と考える。これは、1.匿名性を廃止する、2.参加の設計プロセス、3.文化としての建築づくり、である。今回の耐震強度偽装問題を機に、建築基準法や建築士法の見直しが行われている。はたして、これらの改善の府で耐震強度偽装のような問題が再び生じないのであるか。答えはノーである。私は根本的な部分の議論が欠落していると考え。それは、「信頼できる建築づくり」の議論である。いくら制度を改革しても、偽装という、プロフェッショナルが決めてやっぺはならないことを踏み越えて行なう姿勢自体の倫理の問題と、それを生み出す土壌が変わらない限り、信頼を回復することはできないであろうし、大なり小なりの新たな問題を生み出すことになる。一級建築士が設計するに当たって、その担当した設計内容に対して、しっかりとしたプライドと責任を持つことが大切と考える。これに不可欠なのは、

■「1.匿名性を廃止する」ことである。建築の統括設計者は誰か、構造設計や設備設計は誰が行ったかを個人名で明記することである。これは組織名ではダメである。個人が消えてしまう。自分の名前を記す以上、責任は明確となる。確認申請書に明記されることは必須と考える。これについて、更上「顔の見える設計」にしていける必要がある。つまり、設計者の顔が施主から見えることである。施主が設計者に会い、コミュニケーションを重ねて、設計内容が疎られるという本



連 健夫

来の姿の中で、信頼関係が醸成し、この施主のために設計を行なうという意識が設計者の心の中に生じるのは、人として自然なことである。設計プロセスの中で、構造設計や設備設計者を施主に会わせる機会をつくることは無理なことではない。施主の顔を思いながらの設計は、施主の個性を設計に取り入れる事にもなり、より親密感があり質の高いものを生み出すことになる。私は、設計プロセスの適切な時期に、施主との打合を設備設計者や構造設計者を同席して行なっている。興味深いことは、我々が思う以上に専門的な内容を施主が理解し、創造的対話が出来ることである。このプロセスの中で、施主は設計者の設備的工夫や構造的工夫、更にはその苦勞も知るようになる。これには専門用語を使わず、誰にでも分かるように説明することが大切なことは言うまでもない。

■「2.参加の設計プロセス」とは、施主が何らかの形で、設計のプロセスに関わることである。施主は設計者に対して、要望や予算などの設計条件を与え、設計者はそれに応えるべく設計をする。この場合、設計されたものに対して施主は受身で、両者に十分な信頼関係がない限りは、設計内容に親密感を持つことは難しい。一方、設計者も、専門家としての自分の考え方が優先し、施主のニーズや嗜好をないがしろにし

がらである。この両者にギャップがある限り、しっかりとした信頼関係を築くことはできない。この問題を解決するためには、施主が何らかの形で設計プロセスに関わる必要がある。これには様々なやり方がある。私の場合は、施主にコラージュ（切り貼り絵）を作ってもらい、それを手がかりに対話し、設計コンセプトを見出している。このことにより、施主は、設計コンセプトに、深い理解を示すと共に、設計されたものに対して強い愛着感を抱く。何より、施主が作ったコラージュから設計がスタートしているわけで、施主自身が作ったという意識さえ生まれる。施工中においては、床下に炭を敷くことや壁紙など、施主ができる範囲で参加を勧めている。仮に上手く出来なくとも、自分がやったところは、良いになって良い思い出となる。

これは戸建の住宅のみならず、幼稚園の設計や大学校舎の設計でも、何らかの形で、幼児や学生など、利用者が関わる機会を作ることは可能である。幼稚園のケースでは園児参加でワークショップを行い、色紙を壁に貼ってもらった。校舎の設計では、学生達に理想の校舎のイメージをコラージュで表現するワークショップを行なった。学生達は、新校舎へ自分達のアイデアが活かされることに喜びを感じてくれた。このように、建築家の一方面的なデザインの押し付けを避けることのみならず、施主・利用者の創造性を加味することができ、これは、設計者と施主との創造的協同作業であり、確かな信頼関係を醸成することになる。

■「3. 文化としての建築づくり」は、単にハードな入れ物としての建築を造ることではなく、(意味)のある建築を創ることである。この(意味)とは何なのか。地域性や土着性を加味した建築、建築家の思想を反映した建築、施主や利用者、住民がワークショップを通して得られたコンセプトなど、様々な(意味)がある。近代建築は、機能性、合理性など科学をベースにして生まれた建築様式であった。これはスキル(技能、技術)を使えば、建てられるハードな入れ物という側面を持っていた。問題なのは今、このスキルそのものが問われているのである。スキルだけでは、ハードな建物を作ることはできても文化としての建築を創ることはできない。つまり、確かなスキルのみならず、設計者の思想やモラルが必要とされているのである。文化をつくる姿勢は設計を裏打ちする確かな思想や基本的なモラル無しには生まれない。ハードな入れ物で溢れた近代的都市は、地域や文化の特徴が無く、どこに行っても同じ街並みとなってしまった。これを脱却するためには、伝統を理解し何らかの形で地域性や土

着性を活かす姿勢の中で、新たな文化としての現代建築づくりが求められる。これも(意味)ある建築である。また、市民参加の街づくりの中で、住民が大切にすることも公園や建物づくりに活かす姿勢は、おのずとこの地域の特徴が表出した環境となる。市民参加のプロセスを通して、創り出すものに(意味)が生まれ、それが結果として文化を醸成する。建築家の設計思想も文化を生み出すであろう。但しこれにはしっかりとした社会的モラルがベースとなる設計思想でない限りは文化としての建築にはならない。様々な意味合いがあるろうが、大切なことはハードな入れ物ではなく利用者にとって(意味)のある建築が求められているのは確かである。この「文化の建築づくり」が結果として、利用者が建築に対して興味を持ち、身近なものとして捉えるにも繋がらう。この利用者の高い意識が建築家を刺激すると共に、利用者が監視の役目を担うことになり、建築家もそれに真正面から応える意識が生まれ、結果として高い良い信頼関係が作られる。■イギリスに学生、教師として5年間過ごした。この中で一番強く感じたのは、市民の建築に対する高い意識である。有名建築のみならず、身近な建物の建築家の名前さえ知っていて驚くことがあった。ここに匿名性は存在しない。誰が何を設計したかということが明確で、専門家である建築家が文化としての建物を後世に伝える大きな責任を持っていることを一般の人が認識しているのである。コミュニティアーキテクトという概念はイギリスでは一般的である。市民参加の街づくりやコミュニティーセンター建設、コーポラティブハウスなどの設計を、ワークショップなどプロセスを大切に設計する建築家のことである。ここには、確かな専門性の中で市民と同じ目の高さで設計する姿勢がある。文化としての建築をつくる意識は、施主、使用者、市民、建築家が共有する中で、しっかりとした信頼が醸成されるのである。

遺 徳夫(むらじ たけお)

建築家(有) 建築夫建築研究室代表

1956年、京都生まれ。多摩美術大学卒業。東京国立大学大学院修了の後、ゼネコン10年勤務。1991年に建築、AAスクール留学、AA大学建築専攻校修了後の後、開校助手、東レコンド大学非常勤講師、在英日本大使館建築課を経て1996年帰国。(有)建築夫建築研究室を設立。設計活動の傍ら、ルーテル学院大学、川崎市市民アカデミーの講師など数多くに関わる。白鷺はよくおう地産物おもちゃプラザにて栃木県建築教育賞、茨城県教育賞、こども環境学デザイン奨励賞受賞。ルーテル学院大学前校長は日本建築家協会2006年度優秀建築賞。著書に「心と対話する建築・家」(イギリス念仏舎) (扶輪会出版)、対話による建築も書得(共著、学芸出版社)など

JIA20年史 「建築家って」装丁デザインコンペティション・作品募集

10月に東京で開催されるJIA20周年記念大会開催に向け、JIA20年史「建築家って」を日刊建設通信新聞社から刊行。(編著者/JIA20年史編集会議)それに伴い現在、JIA会員から、本の装丁デザインをコンペにより募集。体裁は新書判、250ページ程度。

■募集

- 1) 名称: JIA20年史「建築家って」装丁デザインコンペ
- 2) 審査員: 小倉善明(審査員長) 伊平剛夫(JIA建築家大会2007東京20周年記念大会実行委員長)。橋本龍行、中田孝、柳澤康志、赤堀忠、櫻田修三、鎌田義男、善養寺幸子、中村高波、森岡茂夫(以上、JIA20年史編集会議委員)、西山英勝(日刊建設通信新聞社社長)(敬称略、順不同)
- 3) 賞金: 最優秀賞1点 副賞10万円
- 4) 審査発表・表彰

審査発表: 2007年8月

表彰: 2007年10月18日(予定) 東京国際フォーラム

5) 主催: 社団法人日本建築家協会、株式会社日刊建設通信新聞社

■応募要項

- 1) 応募資格: 社団法人日本建築家協会会員又は2007年7月31日(火)までに日本建築家協会に入会手続を終了している者
- 2) 作品提出締切日: 2007年7月31日(火)

◇提出の仕方やサイズなど詳細に関しては、

JIAマガジン建築家architects5月号13頁をご覧ください。

提出先: 社団法人日本建築家協会

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館

JIA20年史「建築家って」装丁デザインコンペ係